IAUD

IAUD Newsletter

No.6
2008.09

IAUD Newsletter 第6号（2008年9月号）目次

1. 特集：生活者の視点で考える（2）ー主婦連合会に聞くUD（後編）ー ・・・・・・・・・・1
2. リコーグループのユニバーサルデザインの取り組み ～「人にやさしい」をたくさんの人に～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
3. 岡村製作所の UD 取り組み ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
4. Case study: 食の UDPJ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
5. 世界の UD 動向：第 9 回世界高齢者団体連盟(IFA)世界会議で石川嘉延静岡県知事が講演！ほか ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

特集: 生活者の視点で考える(2)
～主婦連合会に聞くUD(後編)～

日時; 2008 年 8 月 22 日　10 時 00 分～12 時 00 分
場所; プラザエフ（主婦会館）主婦連合会オフィス
ゲスト; 清水鳩子（主婦連合会参与／IAUD 評議員）
山根香織（主婦連合会会長）
聞き手; 成川匡文（IAUD 副理事長／情報交流センター所長）
川原啓嗣（IAUD 専務理事／情報交流センター副所長）
川原久美子（IAUD 事務局長／主婦連合会会員）
蔦谷邦夫（IAUD 情報交流センター）

「生活者の視点で考える」特集～主婦連合会に聞くUD～の後編として前号に引き続いて、山根香織新会長と清水鳩子参与にお話しをお聞きしました。
前回は主婦連とユニヴァーサルデザインとの関わりというところから話がはじまり、日本と欧米の消費者活動の考え方の違いや消費者教育について、さらには消費者運動とコミュニティの力の変化ということから若い人たちの意識や主婦連の活動の変化という流れでお話をお聞きしました。今回は、60周年という大きな節目を迎えられるにあたり、IAUDも含めた新たなネットワークづくりやコラボレーションなど、消費者運動の将来に向けた展望を中心にお話しをお伺いします。

清水： 主婦連の創始者の奥むめお先生は「台所の声を政治に」と、今のように生活者という言葉はありませんでしたが、今でいう生活者の視点、生活の場から発想していますよね。国会で演壇に白菜、キャベツ、ねぎを並べて、こんなに高くなって皆がどれだけ苦労しているか、という演説をしたのですが、そのとき反対したのは女性議員でした。あんなことをするから女性の地位が下がるんだと女性議員が反対したんです。しかし、その時に私は奥先生のやっていることは間違いないと、生活というのは天下国家を論じるだけでなく、子供の教育や住宅ローンのこと、毎日買う野菜のことも大事な政治問題だと思ったんです。今は皆が豊かになったので高い安いということはあまりなくなったけれど、命に関わる安全という問題で皆が立ち上がってますね。

川原久： 私が感動して主婦連に入ったきっかけにもなった、牛肉の缶詰がクジラの肉だったという事件がありましたが、当時の「嘘つき商品」というのは今の産地偽装や賞味期限改ざんなどの「偽装表示」と全く変わってないですね。

山根： 今年10月1日の60周年の記念イベントでは、ヴィデオも上映しますし、「主婦連たより」でおしゃもじ時評を連載いただいている榎そのさんの「マンガで見る60周年」という冊子をお配りしようとしているのですが、それを見ると歴史もわかりますが、より複雑にはなっていますけど状況は相変わらず変わってないということがよくわかります。

清水： 問題の所在は同じなんですよね。ただひとつ違うのは今は赤ん坊おんぶしてでも街頭で訴えるとか、地域ぐるみで行動するというような発想がないですね。誰かがトップダウンで組織として下におろすということだけで、下から上にあがらないですね。やり方が悪いのだと思いますが、リーダーはあなた達どうしたらいいですかと聞くというエネルギーが足りないです。

川原久： IAUDの会員には、企業の人が多いのですがデザイナーや技術者はまじめなモノづくりを考えていても、経営層は企業として成りたたせるために利益を出さなければという意識があって、企業の中でも矛盾があるけれど、一人一人がもう一度原点に帰って企業人も生活者だという意識を持つと会社も世の中もずい分変わってくるのではと思うのですが。

川原： 社員も生活者だというのはその通りだけれど、見ていると会社に対する忠誠心が強いばかりに生活者であることを押し殺してしまっている、会社のためにと滅私奉公しているというところがあって、それで悪いことしてきたから会社を辞めてからNPOで社会のために働こうなんて言ってる。会社にいるときやれって思いますが。(笑)

清水： 会社はやはり目標を達成しなきゃいけないですからね。うちの亭主も会社の人間でしたが、あなたのやっていることは立派だ、間違いはどこにもないけれど道楽だって、会社ではそんなことやれないよって、よく笑って言ってました。

成川： しかしこのところ企業も変わってきましたよね。企業倫理ということが安全とともに第

一になっているところもあって、トップの意識は確実に変わってきています。ちゃんとやらないとえらい目にあいますから。むしろ下の人間が利益出さなくていいんですかって心配になったりして。（笑）そういう意識のかい離はまだあります。

清水： 企業の消費者窓口の人たちもACAP（社団法人消費者関連専門家会議）という組織をつくって、濃密な連絡をとっておられます。

成川： 企業でも消費者の声とかお客様の声を常にお聞きする体制はとっているのですが、ともすると担当者は収集だけが目的になってしまっていて、その後、展開するとか、どういうふうに改善していくシステムをつくるかっていうところはなかなか進まなくて、関連部門に伝えておしまいにするというところがありますね。

清水： ACAPの人たちも私が主婦連の事務局にいたころは、頻繁に消費者団体に来られていました。それは情報が必要だったんでしょうね。今は何か特別な用事があるときしか来られないです。それはマスコミも同じで用事があるときしか来られないですね。生の声を聞くということがなくなったですね。

成川： そういう意味で情報は沢山あるけれどコミュニケーションがだんだんなくなってきましたよね。

清水： コミュニケーションがなければNPOなんか成りたたないですよね。2年くらい前に消団連（全国消費者団体連絡会）が上智大学の新聞学科の先生に依頼してマスコミでの消費者問題の取り上げ方を調査され、消費者運動関連の記事の量が非常に少ないということを書かれていました。消費者運動が活発なころは社会面でなくて一面でしたからね。マスコミだけでなく社会全体の関心が下がっています。UDも人と人、使う人と作る人のコミュニケーションが原点ですから。

成川： IAUDのNewsletterも情報として出したあと、これを読んだ意見が欲しいと申しあげているのですがなかなか難しい。消費者の声を聞くとか海外との情報交流ということを言っていますが、紙の情報やメールでのやり取りだけでなく、ほんとのコミュニケーションというのが大事だと思っています。今日のこのインタビューでもこうやってお会いすると本論だけでなくいろんな話が聞けるし議論できる訳ですからね。

清水： 京都の国際会議のパネルディスカッションでお会いした消費者団体の方や、コーディネータをやらせていただいた自治体首長のセッションでお会いした皆さんも、会うとあの時のことを言われるんですよ。あれで終わりにしないで大事にして欲しいです。

川原： 今あの時の記録を講演集という形で編纂中です。少し遅れているのですが、必ず出します。それが出ればまた違ってくるのではないでしょうか。

川原久： 国際会議がきっかけになって意識が広がって、消費者団体の方の意識が上がれば一般消費者の皆さんの意識も上がってくるはずなんですね。

川原： 次の国際会議は2010年に静岡で開催する予定ですが、4年に一回だけ盛り上がってもしようがないですからね。毎年継続して間を埋めるような活動をしなくてはいけないです。

川原久： IAUDも消費者や生活者の意見を聞くということが課題になっていて、これからどうしようかということを考えなくてはいけないんですよね。国も消費者庁を創設するというとき、庁を作って何をするのかという中身が問題になってきますよね。

山根： 箱だけじゃなくて、これから中身をしっかりやって欲しい、そこにどんどん消費者の声を働きかけなければいけないですよね。

清水： 今回の「消費者庁」はうそつき表示や悪徳商法がきっかけになっていますが、奥先生がいわれた「消費者省」の構想とは全然違うんですよ（前号イラスト参照）。民主党も対案をたてておられますが、それとも発想が全く違います。国土交通省とか厚生省とか経済産業省とか同じようにすべてを消費者の立場で考えるというのが奥先生の考えられた消費者省構想です。夢のまた夢かもしれないですが矮小化しない方がいいです。

川原久： UDの問題点も同じで、複数の省庁を横串刺さなければ解決しない問題ばかりですよね。

清水： ロンドンで開催された79年の第9回国際消費者大会に参加したとき、「表示」という分科会で鯨の缶詰が回ってきたのですが、隣にいた外国の方がノートを破ってメモをテープで貼り付けたので見ると「捕鯨反対！こんな缶詰を作らせることはけしからん。」というメッセージで、表示の問題も日本の国だけで通用することじゃだめだなと思いました。また、フィリピンで開かれた消費者大会に行ったときに消費者教育の分科会に入ったのですが、9割方の発言がうちの国では学校にも行ってない、字も読めないしお金もないから物も買わないんです、水もそこら辺の水を汲んで飲んでいる、そんな子どもに何を教えろというのかということだったんです。国際会議で指摘されるまで気がつかなかったのですが消費者教育と一言に言うけれど狭い日本だけで考えていてはだめ、国際的なネットワークが大事だなとその時反省しました。

川原： 日本から世界に向けて発言する際、まず言葉の問題があって、翻訳などの費用もかかるし、IAUDの英文のホームページでも意識はあるのだけれど完全なものを求めるあまりなかなか進まないですよね。しかし、英語が母国語でない国の人が結構とんでもない英語で意見を通したりしているので、日本人もそのくらいあつかましくならなければいけないかも知れないですね。

清水： 日本からの発信ということでは国際UD会議などでせっかく良い機会をいただいたので、地方自治体の方とか消費者団体の方とかネットワークもあるので何かやりたいですね。

川原： 2010年の国際会議でもぜひ何か企画したいのですが、できたらその前、来年くらいにプレで何かやっておきたいですね。

川原久： 消費者団体だけでなく企業の方も生活者の意見を聞きたいと思っているんです。そこでどう接点を持つかということを真剣に考えないと、お互いに一方通行になってしまいますから。

清水： しかし、企業も団体の代表者と会えば消費者の声を聞いたような錯覚を起こすけれど、奥先生が言われたようにリーダーは常に後方志向を持たなければいけないですね。我々自身が気をつけなければいけないのですが、今は前方志向だけになってしまっていませんか。

山根： ただ、若い人にも意識の高いやる気を持った人もたくさんいて、関心を向けてうまくヒットすると熱心に動いてくれます。

清水： 薬害問題の会でも若い人ばかり、当事者ではなく支援している学生さんがたくさん参加されています。なぜかと聞いてみたら大学のゼミでネットワークができていて、集会に

参加すると単位を出す先生もいる。しかし、大学のゼミのテーマで消費者運動を取り上げる先生は少ないし、学生にとって消費者運動というとオバサンというイメージがあるようで、環境だったら関心が高いそうです。

山根： 使い手との間に距離があるというか、作り手の想いがなかなか伝わってきてないという感じはありますね。家電製品で量販店の店員さんとよく話をするけれど、作った人の想いが、きっと細かい配慮があるのでしょうが、伝わっているとは思えませんね。

清水： 私、製品評価技術機構（NITE）の事故情報解析委員をやっているのですが事故原因として一番多いのは誤使用なんですね。ただ誤使用というくくり方で分類されるけれど、企業と消費者で考え方に違いがあって、企業は取扱説明書にちゃんと書いてあるでしょと言われるけれど、一般の消費者は具体的な注意の仕方が分からない。製品に問題があるとか設計ミスという場合はそんなに対立しないのですが、誤使用の問題で企業と消費者の意見が対立するのはその判断の違いですね。私が見ても消費者に問題があるなと思うこともありますが、そういうことが何回も事故につながっている場合は、表示や製品に問題があるんじゃないでしょうか。

川原： 取扱説明書は何かあった場合のエクスキューズという面もありますが、本来はすべての商品が説明書がなくても使えるようになっていかなければいけないという気がします。最近はだんだん良くなってきていますが、われわれデザイナー側でまだまだ努力不足なところがあると思います。

清水： 技術が高度化してきたから、こうしたら事故は起きないだろうと専門家が思っても、事故は100％無くなることはありえないし、どんな高度な技術も、使う側の対応によりますからね。

川原： どの消費者団体やNPOも高齢化してきて大変だとお聞きしていますが、主婦連は山根会長の代になってぐっと若返ったのではないかという印象があります。山根さんなりの今後の主婦連あるいは消費者運動に対する抱負などはありますか。

山根： まだまだ未熟で勉強しなければいけないことが多くて困っているのですが、今年60周年でまた原点に返ってがんばっていかなければと思っています。また、消費者庁ができることがちょうど周年事業の年に決まって、せっかくのチャンスなので中身を充実するようにみんなで声をあげていかなければいけない、それこそもっとパワーを集めなければいけないところなので、がんばって若い人を引き入れてやっていくことが使命だと思っています。

清水： UDという視点、これからますます大切なんですよね。東京大気汚染公害裁判というのを12年ほどやって全面勝訴というか和解だったのですが、その和解条項で8月1日から東京に住んでいる喘息患者の医療費を無料にしたのと、もうひとつは街づくりなんですね。道路連絡会というのがあって東京都が樹を植えるとか自転車道路をつくるとか具体的な街づくりを進めているんですが、私はそこにUDという考え方を入れるように言っているんです。ダメもとで総理官邸に原告にあってくれるようお願いしたことをきっかけに財源も200億円ほど集まりました。道路だけでなく街づくりに、UDの視点でもっと大きなスケールで考えたいですね。

川原： 最初から考えればお金もそれほどかからないはずです。清水さんが参加されているいろいろな場にIAUDも加わっていくと、会員にはデザイナーが多いですから、マスタープランを作ったり具体的なイメージで分かりやすく表現したりするところでお手伝いがで

きるのではないかと思います。IAUDの街づくりのプロジェクトもテーマ探しに苦労しているところがありますから、ぜひ情報交換しながら進めていきましょう。

成川： あっという間に時間が過ぎてしまいました。話はつきませんが、これで終わりということではなくて、今後も継続してよろしくお願いいたします。本日は長い時間どうもありがとうございました。

話題は多岐にわたり貴重なお話をたくさんお聞きできましたが、誌面の関係でやむなく割愛させていただいた部分があります。主婦連はIAUDの重要テーマである「生活者との対話」という部分でパートナーとなる重要な団体のひとつであり、具体的な活動を通して今後も継続して連携していきたいと考えています。

リコーグループのユニバーサルデザインの取り組み

～「人にやさしい」をたくさんの人に～

株式会社リコー　総合デザインセンター
（国際ユニヴァーサルデザイン協議会　理事長）吉浜 万蔵
早川誠二・今井賢司
2008 年 9 月

■ はじめに

リコーグループは、デジタル複合機やプリンターなどの画像システムや関連機器・サービスを主な事業領域としています。近年、情報化社会の進展とともに、情報機器の高機能化や多機能化が急速に進み、安心・安全で誰にでも使いやすい商品つくりがよりいっそう求められています。
リコーの創業（1936 年）の精神は三愛精神といい、「人を愛し、国を愛し、勤めを愛す」です。また、現在の経営理念では、「私たちの使命：人と情報のかかわりの中で、世の中の役に立つ新しい価値を生み出し、提供し続ける」、「私たちの目標：信頼と魅力の世界企業」と掲げています。情報化社会の中で、持続的な価値を提供することにより、お客様の信頼に応え続けることをモットーにしています。

図 1　三愛精神

■ リコーグループが提供する顧客価値　「リコーバリュー」と「デザインバリュー」

リコーグループではお客様への提供価値として、リコーならではの「地球にやさしい」「人にやさしい」「知識創造を簡単に」の３つの価値を定めており、それらをリコーバリューと呼んでいます。
「地球にやさしい」とは、リコーグループの商品やサービスを通してお客様の地球環境保全に寄与することです。「人にやさしい」とは、リコーグループの商品やサービスの基本機能・性能を誰もが思い通りに使え、維持・管理できることです。「知識創造を簡単に」とは、お客様自身による新たな発想・価値創造、知識労働の効率化を支援すること、お客様に役立つ知識を提供することです。

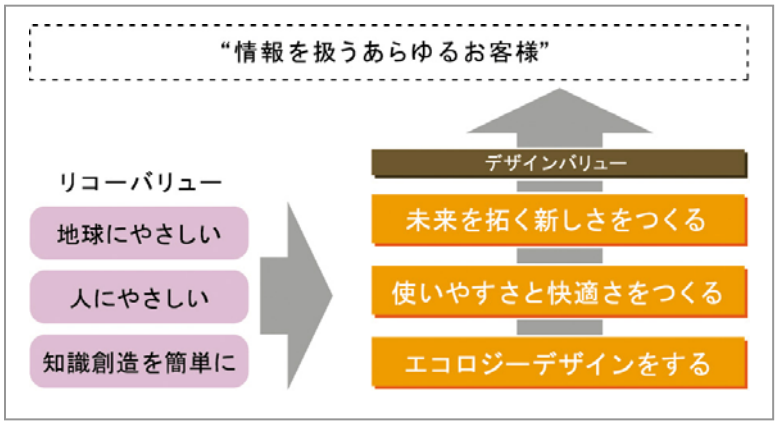


図 2　リコーバリューとデザインバリュー

また、リコーバリューをデザインの視点で展開した3つのデザインバリューを定め、商品デザインに取り組んでいます。デザインバリューを常に意識してデザインに取り組むことにより、「リコーらしさ」を確実に実現した商品をお客様に提供してゆくことができます。(図2)

リコーバリューの中でも、ユニバーサルデザインに関連の深い「人にやさしい」価値を実現することを目標に、情報社会の恩恵を誰もが享受でき、一人でも多くのお客様が快適に使える商品を開発するために、リコーグループでは徹底してお客様起点の発想で、モノ作りや仕組み作りに取り組んでいます。

ここでは、顧客起点でのモノ作りや仕組み作りの事例をいくつか取り上げ、リコーグループにおけるユニバーサルデザインへの取り組みを紹介したいと思います。

■ 取り組み事例

●ユニバーサル製品事例

[デジタルフルカラー複合機 imagio シリーズ]

・片手で交換可能なトナーボトル(図3)
取り出しやすいつまみのついたトナーボトル形状により、片手でも簡単にトナー交換ができます。また、各ボトルの形状は色により異なるため、交換の際にボトルの挿入場所を間違える心配もありません。

・上下アクセス取っ手と軽い引き出し力(図4)
握りやすく、順手でも逆手でも操作が可能な給紙トレイの取っ手です。少ない力で引き出すことができるため、かがみ込む動作も少なくなり、楽に用紙の補給ができます。

図3 トナーボトル

図4 給紙トレイの取っ手

図5 横置き別体スキャナー

図6 原稿セット部、排出部

・横置き別体スキャナー横置き（図 5）
スキャナー部とプリンター部を分離して横にならべて置くことにより、車椅子を利用されている方でも原稿セットや操作を簡単に行えます。
・色のついた原稿セット部および排出部（図 6）
自動原稿送り装置の原稿置き台テーブルをクリアブルー化することで、原稿の取り忘れを防止します。排紙部を明るい青色にして印刷物が確認しやすく取り忘れを防止します。
・操作部チルトと操作キー（図 7）
車椅子を利用されている方にも簡単に操作しやすいように、チルト機構により操作部の角度を変えられるようにしました。操作キーは凹形状で滑りにくく、文字も見やすいオリジナルユニバーサルフォントを採用しています。
・視力の弱い方や不慣れな方でも使いやすい簡単液晶タッチ操作パネル（図 8）
機能をしぼりこみ、操作を単純化することで、基本機能をわかりやすくしました。タッチパネルのキー色を反転可能にすることで、まぶしさを低減しました。文字高を５㎜以上に設定し、高齢者や弱視・色弱の方にも見やすいように配慮しました。

図 7　チルトする操作部

（反転画面）

（通常画面）

図 8　液晶タッチ操作パネル

なお、これらの内容は、imagio アクセシビリティーガイドとして小冊子にまとめ配布しています。また、ホームページでもお伝えしています。（図 9）

図 9 「人にやさしい」をたくさんの人に、のホームページ
http://www.ricoh.co.jp/imagio/accessibility/index_f.html?3000

[ユニバーサルデザインフォント]

電子機器は大型の液晶ディスプレイを搭載し、さまざまな大きさのフォントでメッセージを表示させることで、ユーザーの使い勝手を向上させていますが、従来のフォントでは、小さなサイズの表示が読みづらいという問題がありました。リコーでは、あらゆるサイズで高品位で読みやすい表示ができるフォントを開発し、世の中のさまざまな機器への普及を図ることで、読みやすさやわかりやすさの面で人にやさしい社会づくりに貢献しています。

図 10　2007 年グッドデザイン賞を受賞した「RT Font」

[音声ナビ]

・デジタル複合機本体へ世界で初めて音声認識機能を搭載し、健常者だけでなく視覚障がい者の方々にも使いやすい機能を提供しました。
・視覚障がい者が操作困難なタッチパネル操作に変わる操作方法を設けました。全盲の方には、操作画面を見ずに操作し操作内容の確認ができるようにしました。弱視の方には音声ガイダンスと操作内容の大きな文字による表示とし確認を容易にしました。
・声によるガイダンスやヘルプおよび点字マニュアルや音声マニュアル（DE-ROM）を提供しています。

図 11 imagio 音声ナビ タイプ B を搭載した、imagio Neo C455it/C355it

図 12 音声ナビ用操作画面

●ユーザビリティー評価活動

［バーチャル評価］

まだ実際の機械ができていない開発の初期段階において、ＣＡＤデータと人体シミュレーションを用いて仮想空間での操作性評価を行い、実際に製品を作る前にユーザビリティの検証を行っています。

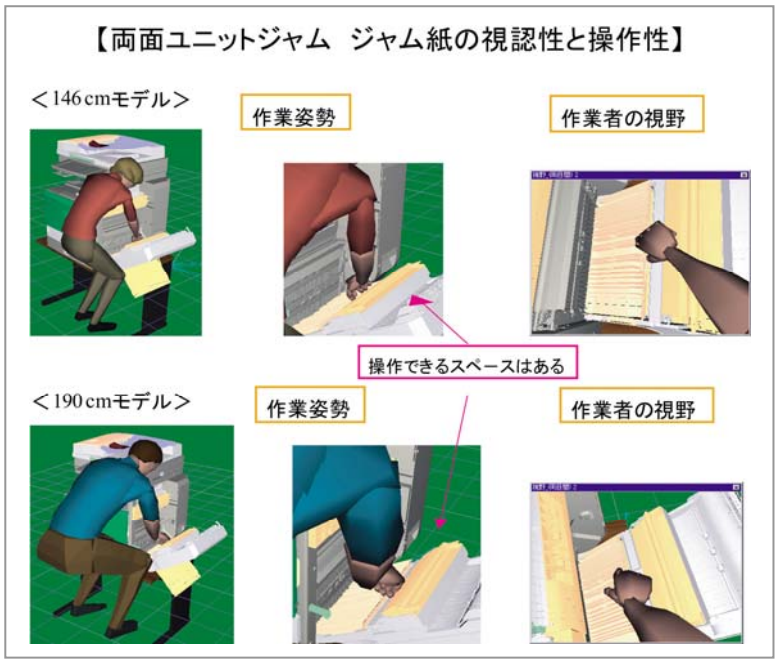


図 13　バーチャル評価

［モニター評価］

実際のユーザーに近いモニターを使い、機器のハード面の操作性や、ソフトウェアの操作性のユーザビリティー評価を行っています。評価結果にもとづき、製品の使いやすさの改善を行います。

図 14　ユーザビリティー評価風景

●ユーザビリティーに関する社外発信

使いやすさに関する調査・評価や啓蒙のための情報をホームページにて社内外に発信しています。

図 15　使いやすさの取り組み

http://www.ricoh.co.jp/appliance/r_motomete/index.html

●カラーユニバーサルデザイン活動

リコーは業界に先駆けてオフィスドキュメントの「モノクロからカラーへの変換」を推進しています。カラー複合機やカラープリンターを積極的に市場に提供し、情報をより豊かに伝える色の効用を十分に享受・活用していただくことを事業活動の柱としています。しかし一方で、人間の色覚には多様性があり、カラー化の促進でお困りになる色弱者の方が多数いらっしゃることも事実です。色覚の多様性に配慮するカラーユニバーサルデザイン（CUD）活動は、まさに情報のカラー化を推進するリコーの社会的使命を果たすことと考え、全社の魅力創造活動として推進しています。今後はさらに、商品の色覚多様性への配慮を充実させるとともに、社内外のコミュニケーションの領域にもカラーユニバーサル活動を拡げ、より多くの人がカラー化の恩恵を受けられる社会づくりに取り組んでいきます。

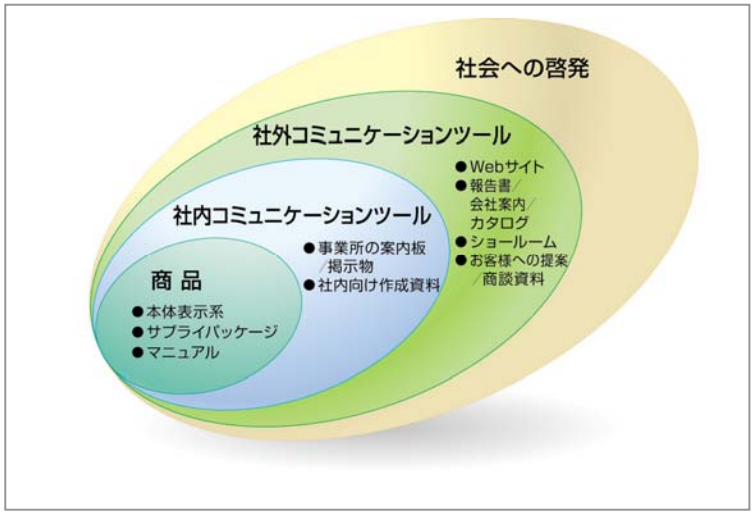


図 16　カラーユニバーサルデザイン活動の広がり

図 17　カラーユニバーサル
デザインガイドライン

●社会的活動

［手話教室・手話でのパソコン教室］

聞こえる人と聞こえない人は、どのように意思疎通を図れば良いのか？ 私たちは常に密なコミュニケーションをとることで、より良い社会の実現ができると考え、解決策を模索し続けてまいりました。手話活動支援グループでは、その経験を少しでも多くの方にお役立てていただくためと、コミュニケーションの重要性を伝えるために研修やセミナーを随時実施しています。また、聞こえない方には手話で学べる講座を実施しております。

［パソコン文字翻訳サービス］

社内セミナーや講演会において、聴覚障がい者向けに話された内容をその場でパソコンにて文字翻訳しプロジェクターで投影しています。この活動は社内ボランティアグループにより運営されています。

図 18 手話でのパソコン教室

図 19 パソコン文字翻訳サービス

●社内啓蒙活動

全社員向けに、ユニバーサルデザインに関連するセミナーや大会を定期的に行っています。また、講演会だけでなく、設計者やデザイナー向けにユニバーサルデザイン体験会を実施しています。体験会には多くの社員が参加しています。

図 20 社内大会

図 21 UD 体験会

■ 今後に向けて

リコーグループにおいては、図 22（顧客起点のモノ作り(I)）のように、ユニバーサルデザインの位置づけをとらえています。一般の方だけでなく、高齢者や障がいを持つ方々にも、ともに使いやすい商品を、一人でも多くの方に提供してゆきたいと考えています。そのためには、モノ作りの考え方が常に顧客起点である必要があります。顧客起点のモノ作りの考え方こそが、ユニバーサルデザイン実現の基本と考えています。

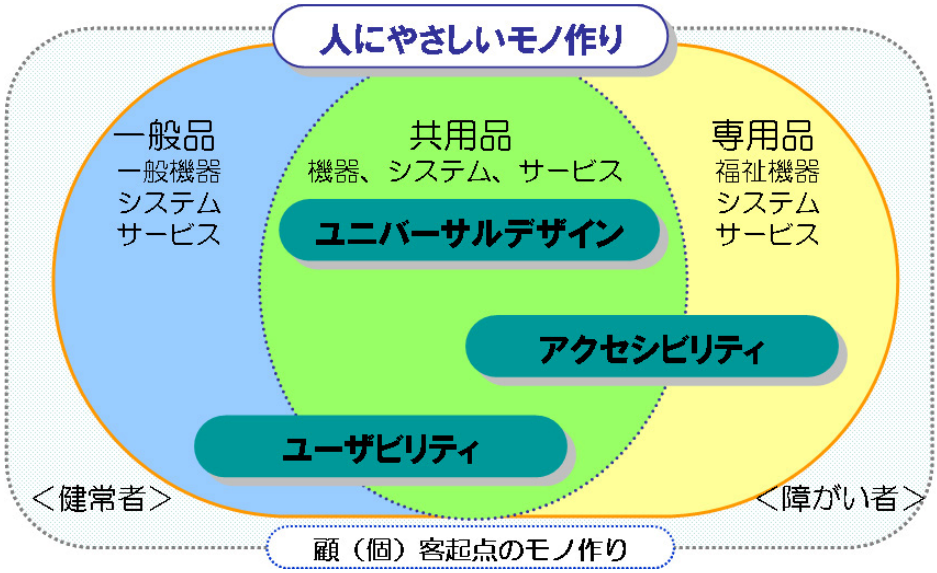


図 22　顧客起点のモノ作り(I)

今回は、リコーグループにおけるユニバーサルデザインの取り組みの一端をご紹介させていただきました。まだまだ、取り組みとしては不十分なところも多々あります。ただ、安心・安全で使いやすい商品を一人でも多くのお客様にお届けするために、今後とも「人にやさしい」商品や仕組み作りに真摯に取り組んでいきます。

さらにこれからは、「人にやさしい」「地球にやさしい」モノ作りや仕組み作りだけでなく、リコーグループとしてユニークな提供価値である「知識創造を簡単に」もふくめ、リコーグループがお客様に提供する機器・サービスにおいて、積極的に展開していきます。今後とも、IAUD の会員の皆様方からの、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

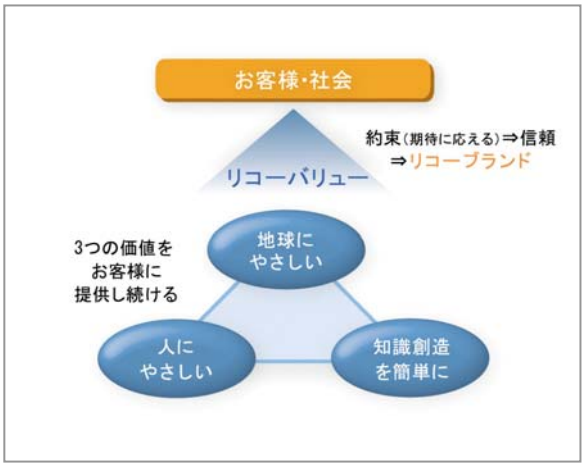


図 23　顧客起点のモノ作り(II)

岡村製作所のＵＤ取り組み

株式会社岡村製作所　デザイン本部　開発管理部
（国際ユニヴァーサルデザイン協議会　理事）　西村　澄夫　2008 年 9 月

●はじめに

オカムラは「良い品は結局おトクです」をモットーに、常にお客様のお役に立つことを願って、数々の製品を開発しお届けして参りました。働く環境はもちろん、人々が集まる環境全てにおいて、快適性や機能性を通してお客様の満足を高めるために努力しています。

ここでは弊社におけるユニバーサルデザインの位置付けと製品開発事例および空間提案事例についてご紹介します。これらを通じてユニバーサルデザインに対する取り組みの一端をご理解いただければ幸いです。

●オカムラのデザインポリシー

オカムラは、誰もが豊かさを実感でき、次世代へより良い環境を引き継げるよう、モノづくりにこだわり上質なデザインの実現を目指しています。製品を通して、さまざまなワークプレイスを魅力ある環境へと創造していきます。

上質なデザインとは「製品のあるべき姿を追求している」「求められているニーズに的確に応えている」「新しい価値を創造している」ことであると位置付け、その実現のためには「クオリティデザイン」「エコデザイン」「ユニバーサルデザイン」の３つの観点からの製品開発が必要であると考えます。（図１）

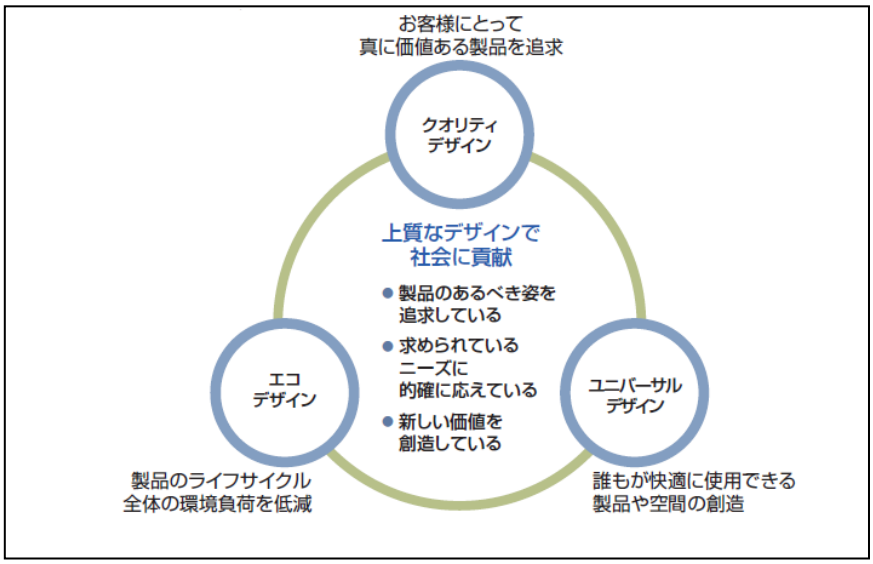


図１　デザインポリシー

●オカムラのＵＤ方針と基本要素

オカムラは、ユーザーの多様性を十分に理解し、一人ひとりの人間性を尊重した社会づくりに寄与する製品開発、空間提案を推進しています。

「ＵＤ７原則」を基本に、オカムラのノウハウを加えた７つの視点から、真に価値あるユニバーサルデザインを提供し、誰もが豊かさを実感できる環境づくりに取り組んでいます。

オカムラでは、その製品と空間を使用すると考えられる多くの人を想定して開発を行ないます。

基本性能をアップし、できるだけ多くの人が快適に使用できるようにし、さらにオプションやカスタマイズで、より多くの人が快適に使用できる環境の提供を目指しています。（図２）

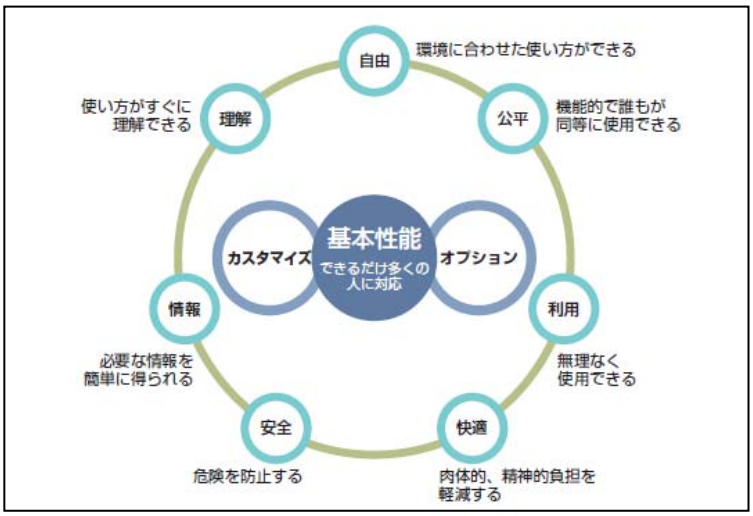


図２ ユニバーサルデザインの考え方

●製品開発事例

【ユニバーサルロビーチェアの開発】

病院をはじめとする医療施設には、車イスを使用している方、杖を使用している方、妊娠している方など、子どもから大人まで多様な方々が集まります。特にロビー空間では、こうした方々が、長い待ち時間を少しでも快適に過ごせる配慮が必要です。今年３月に発売した「ユニバーサルロビーチェア」の開発に際しては、病院にご協力をいただき、患者さんのウォッチング（図３）、患者さんや看護師さんへのヒアリングをはじめ、実際に試作品に座って患者さんにアンケートをお願いするなど、さまざまな調査を行いました。患者さんの身体特性、使われ方やニーズについてデータを収集し、必要とされる機能やサイズを決定するなど、実際の調査から得られたデータを基に製品開発を行ないました。医療施設向けのロビーチェアとして、新たなスタンダードを提案しています。

図３ ウォッチングシート
（患者さんのプライバシーに配慮し、スケッチで調査・記録）

１．１つのシリーズで病院内のあらゆる待合スペースをトータルコーディネイト

病院の待合空間は、総合待合や各診療科の待合など、空間の広さや訪れる患者さんの特性により、さまざまな機能が求められます。「ユニバーサルロビーチェア」は、各々の待合では空間ニーズや患者さんの身体的負担を軽減する機能を満たしつつ、同時に院内待合全体として基本デザインや素材・色合いを統一させており、まとまりのある空間コーディネートを実現します。

２．患者特性・空間特性を配慮した高い機能性

（１）立ち上がりやすい肘形状

肘の形状は、立ち上がるときの補助として、最も自然に手を置いて力を入れやすい形状にしました。人間工学に基づき、立ち上がりやすさを追求した機能的な形状です。
（図４）

図４　立ち上がりやすい肘形状

（２）ホコリが溜まりにくい構造

チェアを隣り合わせに置くと、それぞれの脚がピタリと接合し､隙間ができません。多くの脚が乱立せず､スマートです｡また、脚と脚の間にホコリが溜まりにくくなり、清掃しやすくなります。

座と座、背と座は一体の張り構造とし、隙間をなくしました。ホコリが溜まりにくく清潔で、院内感染のリスクも低減できます。（図５）

図５　ホコリが溜まりにくい脚構造・一体の張り構造を採用

（３）定員着座を促す背の形状

各座席にクッションを付けたデザインは、背当たりの柔らかさを高めるだけでなく、自然にチェアの定員着座を促すことができるため、座席不足を防止できます。（図６）

図６　定員着座を促す背の形状

３．医療施設向けのロビーチェアとしてさまざまなタイプを品揃え

「総合待合タイプ」､「診療科待合タイプ」､「ラウンジタイプ」（図７）､「小児科向けタイプ」（図８）､「産婦人科向けタイプ」､「整形外科向けタイプ」など診療科や利用空間別にさまざまなタイプを取り揃え、それぞれに患者さんの身体的負担を軽減する機能・形状としています。（追加品揃え計画中）

図７　ラウンジタイプ

図８　小児科向けタイプ

「診療科待合タイプ」の奥行きは､「標準奥行タイプ（650D）」と「スリム奥行タイプ（550D）」の２種類を品揃えしています。「スリム奥行タイプ」は「標準奥行タイプ」と比較して背が直立に近い形状で、着座した際に足を前に投げ出さない姿勢を促進できるため、スペースの確保にもつながります。（図９）

図９　標準奥行タイプ・スリム奥行タイプ

通常、腹部への圧迫を避けるために、妊婦の方はイスにのけぞるような格好で座ってしまいがちですが、この姿勢は逆に腰痛を引き起こす要因ともなってしまいます。「産婦人科向けタイプ」では、妊婦の方が身体に負担の少ない適正な姿勢で座ることができるよう配慮した設計を行なっています。座面に前下がりの緩やかな傾斜を付け、背のクッションを厚くして適度な弾力感を持たせることで、背中をしっかりと支えるようにする工夫を施しています。また、１人分の座席の幅を他のタイプよりも広めに設定しています。混雑時にも、手荷物を身体の上ではなく側面に置くことができるため、荷物による圧迫がなく安心です。肘部も張りぐるみとしており、自宅のソファのように落ち着ける温かみのあるデザインとなっています。（図10）

図 10　適正な姿勢での着座を促す形状・座席の幅を広めに設定

身体的制約が多い患者特性を考慮した「整形外科向けタイプ」は、２つの座面の高さのタイプを用意しています。高齢者の使用を想定した座面の低いほうのタイプ（座面高：440ｍｍ）は、座面の前側隅にステッキを固定できるステッキ掛けを取り付けています。整形外科を訪れる高齢者の方の多くがステッキを使用しており、着座したときに手で押さえていることが不自由がないようにと配慮したものです。軟質樹脂製のホルダーで、ステッキの固定・取り外しも容易です。（図 11）

図 11　ステッキ掛け（ホルダー）

一方、座面の高いタイプは、座面を 480ｍｍと高めに設定しており、足をギブスなどで固定した状態の患者さんでも起立・着座がしやすくなっています。ともに座面は前に向かってわずかに下に傾斜した形状で、立ち上がりの際の動作がしやすいよう配慮しています。

●空間提案事例

【病院のスタッフステーション空間改善】

病院に電子カルテが導入されると看護師のワークスタイルが大きく変化します。特にスタッフステーション（図 12）では、パソコンの増設や病室へパソコンを持っていくワゴンが導入され、スペースや配線の問題に直面します。オカムラでは、変化するワークスタイルを的確に予測し、現状の空間診断と限られたスペースを有効に使うための改善提案を行なう「空間ソリューション」をスタートしています。その提案の検証としてキャンペーンを行い、応募された病院で、実際の空間改善を行なってきました。

図 12　スタッフステーション用家具の一例

大阪警察病院様では、電子カルテ導入を機会に、それに対応する家具の入れ替えだけでなく、手狭となったスタッフステーションの一部拡張を含めた看護師の作業環境改善が行なわれました。この実績を、第 20 回日経ニューオフィス賞に応募、近畿地区特別賞を受賞されました。（図 13）

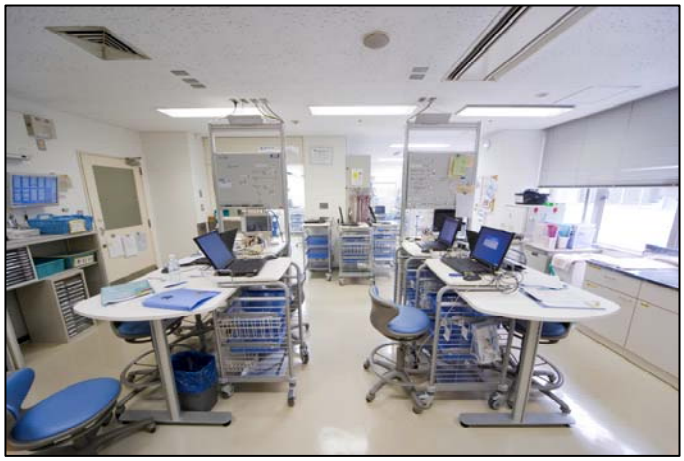


図 13　大阪警察病院様のスタッフステーション

このように､24 時間稼動するハードな現場であるスタッフステーションの空間改善でもオカムラの空間提案のノウハウが活かされています。

日経ニューオフィス賞：日本経済新聞社と社団法人ニューオフィス推進協議会（ＮＯＰＡ）が毎年、快適かつ機能的なオフィスを整備するために、また、感性を刺激し、創造性を高めるために、どのようなオフィス・コンセプトに基づき、どのような具体策が施されているか、そしてどのような効果を上げているかを、「ニューオフィス化の指針」、「今後のオフィスづくりのあり方」、および「クリエイテイブ・オフィスレポートV.1.0」で示された視点を考慮して、審査を行います。今年で第21回を迎えます。
＜http://www.nopa.or.jp/prize/index.html＞

●おわりに

ＵＤ方針と基本要素の「ユーザーの多様性」に関しては、身体的な多様性ももちろんですが、障がいの有無にかかわらず、生産性・クオリティの向上のために、さまざまな人達のさまざまな働き方、考え方があるはずで、そういうものを見直していこうということで、多様性という言葉を使っています。

労働環境のＵＤは、家具・什器だけでなく機器の問題や照明、空調、建築などハード面だけでも、分野やメーカーを超えた取り組みになります。立場は違っていても目指すところはみんな一緒なはずです。まず、自分たちが何をどのようにすべきかというところから探っていきながら活動していくことが大切だと思います。そのためにも、ユーザーの「確かな声」をいかに集められるかが重要なポイントになってきます。

そして、優れたＵＤ製品に対してユーザーから訴求していくことが、これまでの製品と大きく異なってきます。つまり、企業がユーザーに対しＵＤ製品のメリットや展示・購入場所等をわかりやすく伝えるためにも、製品あるいは事業に対してのプロモーションの役割は極めて重要となります。

たえずユーザーの満足を得られる製品・サービスを提供し続けるためには、ＮＰＯなど生活者団体とのコラボレーションを取り入れた開発を積極的に実践して行かなければ、事業を通じての社会貢献に努めることは不可能です。今後、これらを重要課題として取り組んで参りたいと思います。

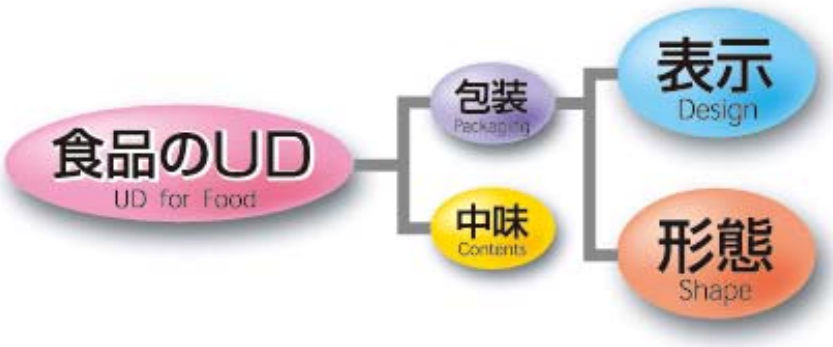
Case study: 食のUDプロジェクト

食生活とユニヴァーサルデザイン
菅原理事ご挨拶

研究開発部会の「食のＵＤ」プロジェクトを担当させていただいております。昨年度までは、「事業・広報部会」の担当の一員として皆様の広報活動のサポートをさせていただきながら組織改革の一端を担い、新組織に移行しました。今年度から、大澤部会長を中心とする研究開発部会の活発な活動の中へ仲間入りです。「食のＵＤ」プロジェクトを支えてこられた皆様に、いろいろ教えを請いながら今年度のテーマと掲げる今までの活動の第２フレーズともいえる①表示の共有化②アレルギー表示③新テーマへの開拓などは、生活者の視点に立った調査の分析と標準化を含めた提案へのまとめや、パッケージそのものの使い勝手の調査まで、ＵＤの視点で作り上げていくもので、この活動に大いに期待しています。「食のＵＤ」研究プロジェクトは、まだ参加企業のメンバーも少ないので「担当理事」としてはこの楽しく白熱した、我々にとってとても身近な「食」とＵＤを考えるプロジェクトにご賛同いただき是非、メンバーとして多くの企業に参加していただけるよう働きかけていきたいと思っています。これからプロジェクトの皆様の、コミュニケーションのサポート役として勤めていきたいと思っています。

食の UD プロジェクト

私たち「食の UD プロジェクト」は、2006年に研究開発企画部会第 6 番目のプロジェクトチームとして発足しました。以来、UD の観点から主に食品パッケージに共通する項目をテーマとして掲げ活動しております。「食」は人が生活をする上で最も重要な行為のひとつです。「食の UD プロジェクト」では「食」を取り巻く環境を UD 視点で見つめ直し、生活者により快適な「食生活」を提供するための取組みを行っております。



食の UD プロジェクトでは生活者にとって快適な「食品パッケージ～表示及び形態」のあるべき姿を考え、そのアプローチを行っています。

●多種多様な食品パッケージ

食品、飲料、菓子等、一言で食品パッケージと言っても多様なカテゴリーがあり、またその内容物に応じて求められるパッケージ機能も多岐に渡ります。扱いやすい容器もありますが、お豆腐のパックやスナック菓子の袋、牛乳パックやペットボトルのキャップ等、使いづらいと言われるパッケージもまだまだたくさんあるのが現状です。

また食品表示がニュースで取り上げられたのは記憶に新しいところですが、パッケージの裏面には、小さなスペースに多くの情報が所狭しと書き記されています。しかしその表示は、「生活者にとって必要な情報」が「正確」に「伝わりやすく」表記されていると言えるでしょうか。食の UD プロジェクトでは、食品パッケージにおける「正確な情報伝達」や「より快適な使い勝手」を実現するためにいくつかのテーマを選定し、メンバーで検討を重ねています。

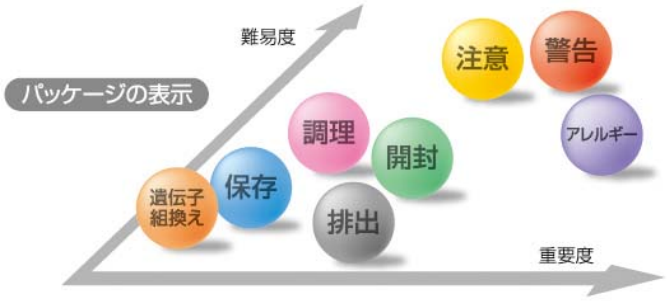
●「ピクトグラム」の認識度調査

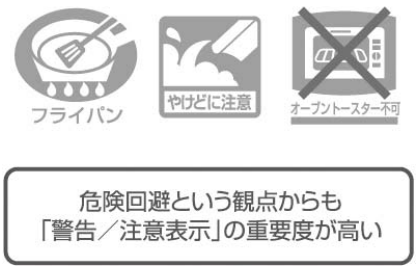
カップ麺や電子レンジ加熱商品等のパッケージに使用される「やけど注意」を警告するピクトグラムは、複数のデザインが混在しています。注意喚起表示をピクトグラム／絵文字で直感的に伝える事は大切な試みです。ただ果たしてそのピクトグラムは生活者が正確に認識しているのでしょうか。そこで「やけど注意」の記号を純粋にピクトグラム（絵文字）としての認識度を調査するため、アンケートを実施しました。その結果「やけど注意」のピクトグラムはすぐそばに記載されている文字情報があって始めて認識されているという実態がわかりました。

認識度のデータは一般的なピクトグラムと比較するため、JIS 化され空港や公共施設で使用されている案内表示のピクトグラムの認識度と同条件で比較をしながら行いました。

●共通化・標準化を目指した「ピクトグラム」検討

上記「ピクトグラム認識度調査」の結果を受け、重要度の高い表示項目はより多くの人が認識できるデザインで、しかも「共通化」を図ることが生活者のために必要だと判断しました。そのため、どのような記号・デザインが直感的・普遍的シンボルになるかを実際に「やけど注意」ピクトグラムのデザインワークを行いながら検証。そのデザイン試作は 08 年 2 月に開催された「IAUD 活動報告会」会場において会員限定アンケートを実施し、その方向性を探りました。現在引き続きデザインワークと、それらを普及させるための方策を検討。今後は関係部署への働きかけをしていきます。



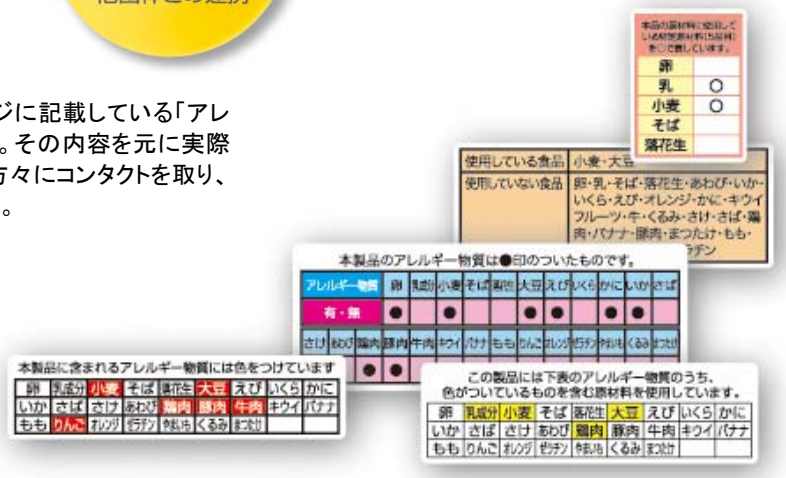


パッケージには「開け口の表示」「調理方法」を始め、「ご注意」「遺伝子組換え情報」「アレルギー表示」等、様々な表示項目が記載されています。その中でも注意喚起表示やアレルギー表示は、生活者にとって重要であり、その表示方法にもわかりやすいデザイン等の配慮が必要です。

●「アレルギー表示」の現状調査

「アレルギー表示」は一般の方はあまり気に留めない表示かもしれませんが、患者さんやその家族にとっては大切な情報源です。現在パッケージに記載されている「アレルギー表示」は法律で定められた義務表示以外に、食品メーカーが独自に記載する一覧表式のデザインがあります。各社工夫をした表記ではありますが標準化はされておらず、実際にアレルギーを持つ方々の話を聞くと、誤解を与える表現も多々あるようです。パッケージの「アレルギー表示」に対し、「NPO食物アレルギーパートナーシップ（FAP）」様が実施したアンケート結果～アレルギー患者を持つ親を中心に実施した約１００名対象のアンケート調査～をもとに、あるべき表示の姿の検討を始めています。

各食品メーカーがパッケージに記載している「アレルギー表示」の実態を調査。その内容を元に実際にアレルギーで困っている方々にコンタクトを取り、あるべき姿を探っていきます。



パッケージにおけるアレルギー表示は、法律で定められている義務表示以外、各メーカーが個別にオリジナルデザインを展開しています。メーカー毎に独自に工夫したデザインではありますが、肝心のアレルギー患者やその家族にとって、誤解を招く表示もあるのが実情です。

●「パッケージの使い勝手」の生活者調査

パッケージの使い勝手について、生活者を対象にユーザビリティ調査を実施しました。パッケージの「開封から使用」という一連の動作の行動調査及びヒアリングというスタイルです。対象者として高齢者及び視覚障がい者の方々にお願いしました。このパッケージユーザビリティ調査は京都工芸繊維大学の久保雅義教授（同大ブランドデザイン教育研究センター長）に協力を仰ぎ、その結果は私たちにいろいろな気づきを与えてくれました。また同時期に、パッケージに関する様々な項目の WEB 調査も実施。現在 2800 人を対象とした調査結果から得られた様々な意見、不満点、要望を順次読み解きながら、使い勝手の良いパッケージ作りのヒントを抽出しています。

普段何気なく手に取るパッケージ。そんな日常的なものであるからこそ、小さな工夫が多くの「快適」につながります。私たちは京都工芸繊維大学の久保教授と共同で「高齢者の方々」、「目の不自由な方々」にご協力頂き、パッケージの使い勝手に関する調査を実施し「生活者を知る」試みを行いました。

協力／京都工芸繊維大学ブランドデザイン教育研究センター
社団福祉法人　京都ライトハウス
社団法人　京都市シルバー人材センター北部支部

より多くの方が快適になる事を目的とする UD。様々なハンデを抱える方々の意見には、使い勝手の良いパッケージづくりのためのいろいろなヒントが潜んでいます。

おわりに

「食品」や「食品パッケージ」は日常生活に密着した、とても身近でなくてはならない生活の必需品です。だからこそ、だれもが快適に使用出来なくてはなりません。

「必要な情報をわかりやすく伝える」
「簡単で直感的に、無理なく使える」

身近であるがゆえにとても大切な「UD 配慮の快適なパッケージ」とは何かを、しっかり検証していきます。現在サントリー・カルビー・ネスレ日本・プロキューブ・大日本印刷と個人会員の方がメンバーです。食品メーカーに限らず、より広く様々な業界の方のご意見も伺いながら、この大切なテーマに取組んで行きたいと考えておりますので、ぜひ皆様のご意見やアドバイスを頂戴したいと思います。また当プロジェクトの活動に賛同頂ける新しい仲間の参加を歓迎いたします。

世界の UD 動向

●第９回世界高齢者団体連盟（ＩＦＡ）世界会議で石川嘉延静岡県知事が講演！

静岡県ユニバーサルデザイン企画監付主幹　伊藤和人

○はじめに

去る９月４日（木）から７日（日）までの４日間にわたり、カナダのモントリオールで世界高齢者団体連盟（ＩＦＡ：International Federation on Ageing）の第９回世界会議が開催され、石川嘉延静岡県知事が日本の行政機関から唯一招聘され、講演を行いましたので、その概要について報告します。

○第９回世界会議開催

世界高齢者団体連盟は、1973 年に設立され、高齢者の利益を代表し、公私の垣根や国、政治、風土を越え、世界中の高齢者の生活の質を改善する使命をもった 62 カ国、150 以上のＮＰＯ・ＮＧＯ団体、法人、研究者を会員とするＮＧＯ団体で、高齢者問題に関する調査研究、高齢者政策の提言のほか、２年に１回、世界会議を開催しています。

今回は第９回の世界会議で、カナダ政府、ケベック州政府、モントリオール市で構成する実行委員会組織のＡＤＭ(Ageing Design Montréal)が主催する「高齢化とデザインＥＸＰＯ in モントリオール」とともに開催されました。

世界会議の概略は以下のとおりです。

○開催期間　2008 年９月４日（木）～7 日（日）（4 日間）
○開催場所　モントリオール国際コンベンションセンター
　「パレ・ド・コングレ」 Palais des Congres de Montreal
○テーマ　今日、明日を形づくる
　Shaping Tomorrow Today
○参加者数　約 4,000 人（展示会入場者を含む。）
○内　容　以下の４つのトラックのもと、6 つの全体会議、57 のシンポジウム、15 のワークショップ、35 のポスターセッションが行われました。
　・トラックＡ　健康とデザイン
　・トラックＢ　社会参加とデザイン
　・トラックＣ　安全とデザイン
　・トラックＤ　マドリッド高齢化国際行動計画の促進
○主要スポンサー　アクサ・カナダ

＜モントリオール国際コンベンションセンター：パレ・ド・コングレ外観＞

○石川嘉延静岡県知事がユニバーサルデザインの取組等を講演

世界会議の３日目、９月６日（土）８：40～10：00に開かれた全体会議（Plenary Panel(3)）は、「自立できる環境づくり」（CREATING AN ENABLING ENVIRONMENT）と題し、石川知事のほか、カナダ政府公衆衛生庁長官のデイビッド・バトラー・ジョーンズ氏、ニューヨーク医学学会のアレクサンドレ・カラチェ氏、デザイン・フォー・オール財団会長のフランチェスク・アラガイ氏の３人が、約1,000人の聴衆を前に講演を行いました。

＜講演する石川知事＞

石川知事は、「ユニバーサルデザインで、だれもが暮らしやすい社会づくり」と題して、本格的な高齢社会に備え、ユニバーサルデザインと長寿健康社会づくりを進め、だれもがいきいきと生活できる「魅力ある“しずおか”」の実現を目指すことを論旨として、「静岡県の紹介」、「高齢社会の進展」、「しずおかユニバーサルデザイン」、「誰もが暮らしやすい地域づくり」などについて講演を行いました。

講演の要旨は、次のとおりです。

静岡県は、日本の中央に位置し、日本人の心のふるさとである富士山で有名です。政治、経済、文化面において標準的な地域という特性があり、企業の新製品の市場テストが行われることでも知られており、「日本のことを効率的に知るには、静岡県に行くのが一番」と言われています。

また、ヤマハ、カワイ、スズキに代表される世界的な企業が集積し、ハンガリー共和国と同規模の経済基盤を有しています。

Ratio of Population over 65 Years Old

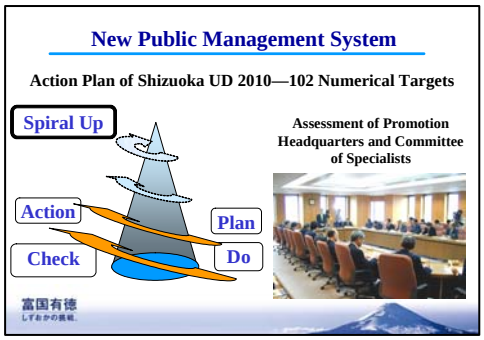
Country/Year	1985	1995	2005	2015	2025
Sweden	17.9	17.5	17.2	20.2	21.9
Germany	14.6	15.5	18.8	20.9	24.4
U.S.A.	11.7	12.4	12.3	14.1	17.8
Spain	12.0	15.3	16.8	18.3	21.4
China	5.1	6.0	7.7	9.6	13.7
India	3.7	4.2	5.0	5.8	7.7
JAPAN	10.3	14.5	20.1	26.9	30.5
SHIZUOKA	10.3	14.8	20.5	27.6	31.6

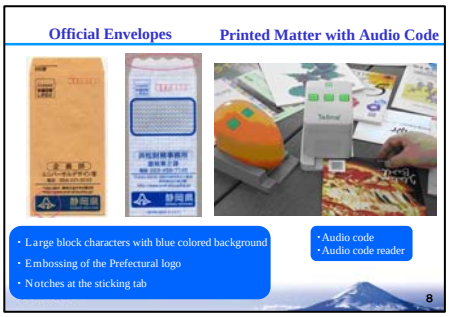
UN, World Population Prospects: 2006 Revision
※Japan's figures based on the Census by the Ministry of General Affairs & National Institute of Population and Social Security Research

日本の高齢化率は、20年前（1985年）には10.3％と欧米諸国より低かったが、2005年には20％を超え、世界一高齢化率の高い国となりました。今後も高齢化率は上昇を続け、20年後の2025年には30％を超え、世界のどの国も経験したことのない超高齢社会になると見込まれています。特に、静岡県は温暖な気候と恵まれた生活環境等を背景として日本の中でも高齢化率の高い県になっています。

そうしたことを踏まえ、静岡県では活力ある長寿社会を築くため、高齢期を生きる誰もが「自らの意思で、その人らしく暮らせる長寿社会」を目指す「ふじのくに長寿社会安心プラン」を進めています。

静岡県では、平成11年（1999年）、日本の行政機関として初めて、ユニバーサルデザインを行政運営の主要方針に位置付け、平成22年（2010年）までを計画期間とする行動計画に基づき、県の全組織を挙げてその推進に取り組んでいます。推進に当たっては、Plan-Do-Check-Actionのサイクルにより常に改善を行い、ユニバーサルデザインのスパイラルアップを図るとともに、各分野の有識者による外部評価を含め、進行管理を行っています。





「誰もが暮らしやすい地域づくり」のための様々なユニバーサルデザインの実践事例を紹介します。

ユニバーサルデザインの考え方を普及するため、市町村職員、事業者、小・中学生を対象とした講座を開催しています。また、建築物、印刷物、イベントなど様々な分野でユニバーサルデザインを取り入れるためのガイドラインやマニュアルを作成しています。

誰にも分かりやすい情報を提供するため、視覚障害者や外国人にも分かりやすい公用封筒の使用や音声変換できるコードを付与した印刷物の提供などを行っています。

ユニバーサルデザイン教育を推進するため、小・中学校でユニバーサルデザインを教えるための教師用マニュアルを作成し、インターネットで公開しています。

公共施設の整備に当たっては、利用者の意見や要望等を取り入れるため、県民の事業への参画を進めています。例えば、静岡市内の歩道整備では、数種類の実物大の仕様模型（モックアップ）を作り、車椅子使用者や目の不自由な人、子育て中の人などに歩きやすさや安全性などについての検証を行いました。その結果、歩道の端に縦筋が入ったタイルを設置し、車道と歩道の段差を解消するとともに、雨水透過性のタイルのつなぎ目を工夫することにより、雨の日の歩きやすさと、車椅子使用者やベビーカー利用者が歩きやすい歩道整備を行いました。

公共トイレでは、オストメイト用洗浄機や手すり等を設置した多目的トイレの設置や、子ども用便器やオムツ替えができるベッドを設置したブースが男女双方に設置され、トイレ全体で様々なニーズに応えられるようになっています。

県立総合病院では、既存のサインシステムを改修するに当たり、高齢者、目の不自由な人、外国人などに配慮した五感に訴えるサイン整備を行いました。

家具メーカーと県との共同研究により、高齢者に優しい和室用テーブルセットなどユニバーサルデザイン製品の開発にも取り組んでいます。

静岡市内のスーパーマーケットでは、子ども用買い物籠や広い店内の通路など、だれもが楽しく買い物ができるよう整備されています。

最後に、皆様への御案内です。世界のユニバーサルデザインの研究者等が一堂に会し、まちづくりや医療・福祉など様々な分野の講演や論文発表、企業展示が行われる「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議」が2010年の秋に静岡県で開催されます。

静岡県民380万人とともに皆様の多数の御参加を心からお待ち申し上げます。

以上の講演終了後には、他の講演者や各国の参加者から高い関心と賛辞が寄せられるなど、大きな反響がありました。

○ケベック州高齢者担当大臣との会談

同日の午後、石川知事は、ケベック州家族・高齢者担当大臣のマルゲリト・ブレ氏と会談を行いました。ブレ大臣は、ケベック州が日本に次いで高齢化が進んでいることから、高齢化の先進国である日本の政策に大きな関心を持っていました。

知事は、現在、日本では、持続可能な年金制度と介護労働者の確保が大きな課題となっていることに触れるとともに、介護労働者問題への対応として、人手に代わる機械化・ロボット化の急速な進展には目を見張るものがあることなどを紹介しました。

＜ブレ大臣との会談＞

○国際モザイカルチャー委員会会長等との会談

ブレ大臣との会談に引き続き、国際モザイカルチャー委員会会長のリーズ・コルミエ氏、カナダ日本庭園協会会長のクロード・ガーン氏等と会談し、コルミエ氏から 2009 年に静岡県で開催される「浜松モザイカルチャー世界博 2009」への協力依頼があり、石川知事は全面的に支援する旨回答しました。

＜コルミエ会長等との会談＞

○高齢化とデザインＥＸＰＯ

カナダ政府、ケベック州政府、モントリオール市で構成するＡＤＭが主催する高齢化とデザインＥＸＰＯは、世界会議と同じ会場で開催され、高齢者が暮らしやすい生活を送るための生活用具やユニバーサルデザイン製品など、約 100 ブースの出展が行われました。

○シンポジウム・ワークショップ（分科会）

会場では、4 テーマに、70 以上のシンポジウムやワークショップが開催されました。日本からの参加では、ＩＦＡの唯一の日本理事である穂積恒氏のグループによる絵画によるヒーリングアートの取組、高齢社会を良くする女性の会の代表、樋口恵子氏のグループによる高齢女性の社会参加、人間中心デザイン研究所長のヴァレリー・フレッチャー氏、静岡文化芸術大学教授の古瀬敏氏とＴＯＴＯ㈱によるユニバーサルデザインへの取組などが発表されました。ＴＯＴＯのシンポジウムには、100 名余の参加者があり、高齢社会に向けて、ユニバーサルデザインが果たす役割や重要性などの紹介に続き、ＴＯＴＯのＵＤ研究所が行った浴室等での使用者の動作分析の様子が動画で紹介されると参加者は熱心に画面に見入っていました。この分析をもとに、浴室の手すりが製品に組み込まれるなど、ユニバーサルデザインを導入した使いやすい製品づくりの紹介に多くの参加者が日本のものづくりの先進性を強く印象づけられたようでした。

○政府高官会議

世界会議の開会日である 9 月 4 日（木）には、各国の高齢者政策の担当副大臣や局長クラス約 60 人が出席して、政府高官会議が開催されました。

「Ageing in Place」（高齢者の社会参加）をテーマとして、カナダ、オーストラリア、オーストリア、アメリカ、イギリスなど、23 人が自国の高齢者政策の概要や方針などを発表しました。

各国に共通した内容は、今後の急速な高齢化の進展に的確に対応した政策が重要であること、高齢化や老いるということを否定的に捉えるのではなく、積極的に位置付け、高齢者の力をいかに社会に生かすかが重要であること、高齢者が社会の中でいきいきと生活するためには、人と人との繋がり、地域コミュニティとの繋がりが大切であることの 3 点でした。

〇おわりに

少子高齢化の進展に伴い、だれもが暮らしやすい社会づくりの重要性はますます高まっています。今回、世界高齢者団体連盟の世界会議での静岡県知事の講演を通して、ユニバーサルデザインが豊かな長寿社会の実現に大きく寄与することを再認識するとともに、高齢化の先進国である日本が、また、ユニバーサルデザインの先進県である静岡県が、積極的に世界に情報発信していく意義も感じました。そういう意味で、2010 年に静岡県で開催される「第 3 回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010」は、静岡県の多彩な魅力とユニバーサルデザインの先進性を国内外に情報発信する絶好の機会であると言えます。会議の開催が、誰もが暮らしやすい社会づくりへの飛躍の機会となるよう取り組んでいくことが重要であるとの思いを新たにし、報告を終わります。

●スウェーデンにおける自立生活運動２５周年国際会議へのご招待

2008 年 11 月 28－29 日ストックホルムにて

自立生活運動はどこまで進展したか、また我々はどこに向かおうとしているのか？スウェーデンの自立生活運動２５周年を記念する会議では、スウェーデン、ヨーロッパ、その他の国々での国際公民権運動の成果を評価し、また明日への進め方を見極めて参ります。

下記記載の出席者及びスウェーデンでの運動代表者、行政、研究機関、政界の協力者と共に、各々の国や地域で成功した戦略や実践の好例について討論し、進展を振り返り、また今後の進路を定めます。

Judy Heumann（アメリカ）	中西正二（日本）
Marilyn Golden（アメリカ）	John Evans（イギリス）
Bente Skansgård（ノルウェイ）	Horst Frehe（ドイツ）
Kalle Könkkölä（フィンランド）	Jos Huys（ベルギー）

全体会議およびワークショップでは、差別の撤廃やアクセシビリティのための、また他の国々に自立生活の理念を拡大するための脱施設化、個人的支援と法制化作業について、経験を皆で共有します。我々は社会政策に影響を与えることができただろうか、我々の活動が障害者に対する社会や我々自身の見方に効果的な影響を与えただろうか、グループの生活条件を具体的に改善できただろうか、完全な市民権、自己決定や自尊心を獲得するための戦いでは、どのようにすればお互いに支援をより強化できるか、などについて議論します。

会議には、障害者、障害者団体、サーヴィス業、公務員、政治家、研究者、一般の方にご参加いただき、新しい仲間、洞察や刺激が得られることを望んでいます。

本会議はスウェーデン自立生活ネットワークが主催いたします。

〇プログラム（予定－2008 年 9 月 4 日現在）

11 月 28 日　ホテル・スカンディック・コンチネンタル（ストックホルム中央駅）にて
午前 9：30～午後 6：00　昼食 1:00

午前：スウェーデンの自立生活運動の進展とアプローチについて
　　－　歴史、当団体、モデル、計画、国家的影響
午後：ヨーロッパと他の国々の進展について
　　－　社会政策や実践に関する国家的・国際的影響
形式：短いプレゼンテーションおよびパネルディスカッション
英語からスウェーデン語への同時通訳つき
英語での参加者には個別の通訳がつきます。

11 月 29 日　　会員団体 JAG（ストックホルム、 Klara Södra Kyrkogata 1）にて
午前 10:00～午後 5：00　昼食 1：00

午前：パラレルワークショップ
1）アクセシビリティの法制化
2）個人的支援
午後：パラレルワークショップ
1）脱施設化
2）自立生活の他国への拡大と国際的発展へ影響力ある政策
形式：短いプレゼンテーションおよびパネルディスカッション
英語とスウェーデン語の通訳がつきます。

申し込みやホテルに関する情報については、Ms. Nicoletta Zoannos までお問い合わせください。アドレスは、nicoletta.zoannos@independentliving.org/　です。

情報は随時更新する以下サイトにてご確認ください。www.independentliving.org/25years2008/

●ユニヴァーサルデザインフォーラム in 札幌　速報

このフォーラムはＩＡＵＤが主催し、９月に発足したばかりの「北のユニバーサルデザイン協議会」（NUDA）と札幌市立大学の共催により、北の暮らしの特性を理解し誰にでも快適で安全な暮らしや余暇生活の質向上の提案を行うことをねらいとして、９月 22、23 日の 2 日間、札幌市内の会場で開催された。

初日の 22 日は「北の暮らしとユニヴァーサルデザイン」をテーマとして札幌駅の近く札幌市ＡＣＵ（大学共同利用施設）の研修室に目標の１００名を超える参加者を迎え、講演会とパネルディスカッションが開催された。フォーラムはＩＡＵＤの牧野普及事業委員長による開会の辞でスタート。主催者を代表しＩＡＵＤの吉浜理事長、札幌市立大学の原田昭学長とＮＵＤＡの副理事長でもある酒井札幌市立大学教授からそれぞれあいさつがあり、引き続いて、ＩＡＵＤのイベントでもおなじみのエルゴノミデザインのダーグ・クリングステッド代表による基調講演と、札幌大学の千葉博正教授による特別講演が行われた。

ダーグ氏の基調講演では母国であるスウェーデンの歴史や社会的背景を含め、スクリーン上の写真や実際の製品サンプルをふんだんに使って開発の考え方やプロセスが分かりやすく紹介された。同じ北国のＵＤを考えるうえで、また、ＮＵＤＡ設立直後のイベントにふさわしい内容だったのではないだろうか。特別講演の千葉教授は北国の福祉の街づくりにも深く関わってこられ、札幌の状況の紹介を通して、シームレスな交通システムやコミュニティによる取り組みの重要性について話された。その中でもソーシャルキャピタル（人間関係資産）というイタリア発祥の考え方がキーコンセプトとして取り上げられていた。

そのあと行われたパネルディスカッションでは講演の二氏に、北海道立工業試験場の吉成哲科長とＨＢＣ（北海道文化放送）「石井ちゃんとゆく！」の山田もと子ディレクターの二人が加わり、さまざまな事例紹介とフォーラム参加者も交えての熱い意見交換が行われた。ここではものづくりや街づくりそのものと同じくらい、それを利用者に分かりやすく伝えコミュニ

ケーションしていくことの重要性と、そのなかでＩＡＵＤやＮＵＤＡの果たす役割などについて議論が交わされた。コーディネーターは細山ＵＤ－Unit の細山雅一代表が務めた。

初日終了後、参加者を交えての懇親会がフォーラム会場から歩いて 15 分くらいの札幌ファクトリー「ビアケラー札幌開拓使」で行われ、お互いの親睦を深めるとともに、今後のＵＤの在り方や団体としての活動展開などで話が盛り上がった。

翌 23 日のワークショップは会場を札幌の隣のＪＲ桑園駅前の札幌市立大学看護学部のある桑園キャンパスで行われた。「余暇のＵＤサービスシナリオの提案」をテーマとして、円山動物園でのフィールド調査をもとにシナリオ作成を中心に行うもの。プログラムはデザイナーと学生を含めた１チーム６～７名のグループで、今回は３グループで進められた。各グループには視覚障がい、聴覚障がい、下肢障がい（車いす使用）の方がユーザーとして各１名参加し、全プロセスはユーザーと参加者の対話を中心に進められる。朝８時半に会場に集合し、オリエンテーションのあとバスで円山動物園へ移動、午前中のフィールド調査をもとに午後は桑園キャンパスに戻ってシナリオとプレゼンテーション作成、夕方４時半には発表とかなりのハードスケジュールだ。

今回は時間がないこともあり調査対象から動物園へのアプローチについては除外し、園内に限られた。円山動物園への移動は車いすのユーザーもいるためリフト付きの観光バスが使用されたが、こんなことも体験してみなければ分からない貴重な経験である。

桑苑キャンパスに戻り昼食を弁当で効率よくすませて、各グループでシナリオづくりに取りかかる。会員企業から参加したプロのデザイナーがリーダーとなり学生とユーザーとしっかりコミュニケーションしながらアイデアをまとめてゆく作業がそれぞれのグループで熱く進められた。

予定通り夕方４時半からスタートしたプレゼンテーションは、それぞれ努力と工夫の跡がうかがえる内容だった。今回のプログラムではデザインプロセスを学ぶことが重要であり、また時間の関係もありＵＤサービスシナリオをつくるところに重点がおかれていたので、ここでは詳しい内容の紹介はしない。しかし、アウトプットのクオリティはそれほど問題ではないとはいえ、さすがに時間に制約のある中で鍛えられたデザイナーがメンバーにいることで、３グループともしっかりユーザー視点で課題がとらえられ、それなりのレベルの提案にまとめられていた。学生の参加者にはそのプロセスも貴重な体験になったのではないだろうか。また、参加者にとってユーザー参加型のデザインプロセスを身につけるという意味で、ユーザーと現場で直接対話しながら進めるという作業は貴重な体験だったに違いない。

最後に酒井教授がそれぞれのグループの講評と全体講評を行い、牧野普及事業委員長の閉会のことばでワークショップと２日間のフォーラムの全プログラムを終了した。

今回のフォーラムを通して、ＵＤに取り組むにあたり現場で考えることの重要性と、ユーザーとしっかりコミュニケーションすることの重要性を改めて感じさせられた２日間だった。また、今回のイベントを企画し準備と実際の運営に携わられた皆さんは大変だったと思います。皆さんに敬意を表するとともにＩＡＵＤとして意義のある活動のひとつであり、継続することが大切だと痛感しました。関係者の皆さまお疲れさまでした。

●さいたまユニバーサルデザインフェア～ＩＡＵＤの活動をパネルで紹介

展示と体験を通してＵＤの一層の普及を図るイベントが９月１５日敬老の日、ＪＲさいたま新都心駅前のコンコースで開催され、ＩＡＵＤもパネル展示で活動を紹介した。

埼玉県をはじめとする県内自治体や企業・団体により、さまざまなＵＤ活動や取り組み、商品などが紹介されたが、ＩＡＵＤブースでは活動紹介のパネルと 2006 年の国際ＵＤ会議の論文集を展示し、ＩＡＵＤの活動をアピールした。商品やパネルの展示だけでなく高齢者の模擬体験と車いすの体験ができるコーナーやブースを回って答えを探す UD クイズなど、家族ずれで楽しめるよう各ブースで工夫が凝らされ、来場者と積極的にコミュニケーションする姿が見受けられた。

フェア会場近くには飲食店やショップもあり、また、同日は隣接するさいたまスーパーアリーナでもイベントが開催されていて、会場すぐ横でもストリートミュージシャンによるライブステージがあるなど、会場付近は人通りも大変多く、その行き帰りに立ち寄る家族ずれなどの姿が目立った。

●『第７９回かわさきデザインフォーラム』

■テーマ　　『ユニバーサルデザインと経営』
■講師　　富士通デザイン株式会社　代表取締役社長　加藤 公敬 氏
■開催日時　平成 20 年 10 月 10 日（金）
　　14:30ー16:30　テクノロジーホール見学
　　16:30ー17:45　講　演
　　18:00ー20:00　交流会（@富士通クロスカルチャーセンター）

■会場　　富士通株式会社 川崎工場　＜詳細は当日、工場受付で案内＞
　　川崎市中原区上小田中 4-1-1（TEL: TEL:044-433-5490）
　　ＪＲ南武線 武蔵中原駅より徒歩 3 分
■会費　　無　料／交流会参加者のみ 2,000 円（学生 1,000 円）
■定員　　70 名（申し込み先着順）
■申込方法　E-mail、FAX 又は郵便でお申し込みください。

※申込締切　１０月６日（月）
　（締切前でも定員に達し次第、受付終了となりますのでお早めにお申し込みください。）
※詳細につきましては、下記 URL をご覧いただくようお願いいたします。

＜第７９回かわさきデザインフォーラム案内＞
http://www.kawasaki-net.ne.jp/design/kdf/forum/forumindex.htm

＜No.076（2008.09）かわさきデザインフォーラム通信＞
（前回デザインフォーラム報告、かわさき産業デザインコンペ 2008 作品募集）
http://www.kawasaki-net.ne.jp/design/kdf/forum/df_top.htm

●CIPEC NEWS

−子どもの傷害予防に関する情報をお送りいたします−
本日は「米国の改正・消費者製品安全法」のニュースをお送りさせて頂きます。

****
「米国の改正・消費者製品安全法が上下院を通過し、成立の見込み」
The Consumer Product Safety Improvement Act 2008（改正・消費者製品安全法）が米国上下院を大多数の賛成で通過、大統領の署名を待って成立の見込み。この法律は、近年（特に昨年)、米国で問題になった鉛含有玩具や、ペットフードなどの安全性への疑問から成立が促進されたものである。

本法は、包括的な視野から消費者製品の安全性を高めることを目的とし、製造から輸入、小売まですべてをカバーする。また、Consumer Product Safety Commission （CPSC、消費者製品安全委員会）の機能の大幅見直しも盛り込まれている。本法が成立した後、CPSC は各種調査の実施、具体的な規制・手続きの策定に入る。
****

The Consumer Product Safety Improvement Act 2008（改正・消費者製品安全法）が米国上下院を大多数の賛成で通過、大統領の署名を待って成立の見込み。この法律は、近年（特に昨年)、米国で問題になった鉛含有玩具や、ペットフードなどの安全性への疑問から成立が促進されたものである。

本法は、包括的な視野から消費者製品の安全性を高めることを目的とし、製造から輸入、小売まですべてをカバーする。また、Consumer Product Safety Commission （CPSC、消費者製品安全委員会）の機能の大幅見直しも盛り込まれている。本法が成立した後、CPSC は各種調査の実施、具体的な規制・手続きの策定に入る。

本法の成立により、玩具とこども用製品（12 歳以下のこどもを主たる使用者とする製品）のすべてについて販売前の安全性テストが義務づけられる。また、鉛、および、発がん性や生殖機能への影響が疑われているプラスチック可塑剤のフタル酸（エステル）を玩具に使用することが禁止される。さらに、これまでは自主性にまかされていた安全基準も義務づけとなる（例：玩具に使われている希土類磁石がはずれないような作りにする－2003～06 年に米国では、この磁石を飲み込んだこども 1 人が死亡、19 人が除去のために手術を受けた)。本法の規制内容は、海外から輸入される製品にも適用される。

また、市民がアクセス可能な「消費者クレーム・データベース」の設置も定められた。消費者、政府・自治体、医療機関は製品クレームや傷害情報をデータベースに報告できるだけでなく、誰もがデータベースにある安全情報を検索し、情報を入手することができる。このデータベースは玩具だけに限らず、ライター、電動のこぎり、ベビーベッドなど、多くの製品を含むものとなる。

本法は、1973 年に設立されたものの、これまで非常に限られた財源と権限しか持たなかった CPSC に、より強い権限とその施行のための財源を与えている。CPSC はリコール権限のほか、安全基準に違反した業者に対し、より強い民事罰を科すことができるようになる。たとえば、製品のハザードを報告しなかった企業、安全基準に違反していた企業に科せられていた罰金はこれまで上限＄1.8million だったが、今後は＄15million を支払うケースも出てくるであろう。また、製品の欠陥・不具合を内部告発した者を保護する内容も本法には含まれている。

本法の成立により、CPSC の今年度の予算は、＄80million から＄136million に増額され、スタッ

フも増員される。(予算増額は 2014 年まで継続)

本法の成立は、これまでの「リアクティブ (reactive)」(問題が起こってから対応する) な消費者安全システムから、「プリベンティブ (preventive)」(予防的) なシステムへの歴史的な移行として、消費者製品安全にかかわる各方面、玩具業界、こども用製品業界から歓迎されている。

(The Washingon Post, 8/1/2008, Consumer Union, 7/29/2008)

CIPEC の詳細はこちらをご参照ください。
子どもの傷害予防工学カウンシル (Childhood Injury Prevention Engineering Council)
http://www.cipec.jp/

Newsletter では、誌面を会員の皆さまの UD に関わる情報交換の場と位置づけています。
ぜひ、会員企業の UD 商品開発事例や PJ/WG の活動成果事例等の情報をお寄せ下さい。
また、国内外の UD 関連イヴェント、シンポジウム等の開催情報もお寄せ下さい。
ご連絡は、news@iaud.netへ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいはサロンへお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter No.6
2008 年 9 月 30 日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局:225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
電話:045-901-8420 FAX:045-901-8417
e-mail:info@iaud.net
IAUD サロン:104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9
トヨタ八丁堀ビル 4 階
電話:03-5541-5846 FAX:03-5541-5847
e-mail:salon@iaud.net